



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

## 「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

### 第8回：社会福祉・教育事業及び国際協調編

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之  
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

前回で紹介したように栄一が関与した企業が約500社と言われるなか、社会福祉・教育や国際協調等への取り組みは、実に600事業に上ると言われている。また古希を機に実質的に実業界から引退したことと比較して、これらのジャンルの事業からは引退することなく終生関わった。彼は「社会事業は国づくりの基本であり、常に私の心から離れることはなかった」と言っている。彼は孔子の説く「忠恕」の精神から来る「博施濟衆」や「救貧や防貧」を説いているが、一方で合理主義者的な側面から、「自由経済は時として多くの困窮者を生ずるが、これは利による弊害であり、従って困窮者の救助は社会の義務である」とも言っている。

#### 社会事業に駆り立てる母親からのDNA

なぜ栄一は深く社会福祉・教育事業に生涯を賭けて関わっていったのだろうか。その大きな理由を考えると2つのことが言えると思う。

一つは母の教えであり、母のからのDNAを引き継いだものであろう。もう一つは、ヨーロッパ滞在中に見聞し経験したことが要因となっていると言えよう。

母は本当に慈悲深い人で、困った人がいると見て見ぬふりができない性分であった。後年、栄一は母について「～(略)～偉ぶらないで慈愛に富んだ人だった。陰になり日向になり、よく面倒を見てくれる人だった。～(略)～」と言っている。母の背中を見て育ったその影響は大きかったと言えよう。

次が主君徳川慶喜の弟、昭武と一緒に滞在したフランス・パリを中心とする欧州各地での経験である。ヨーロッパ滞在中では、主に以下のことが栄一の心を揺り動かした。

□ロシア皇帝がパリ万博で開催された競馬競技会に参加し、そこで得た10万フランの賞金をそっくりパリの貧困者の施設に寄付をした。

□マルセイユで視察した学校に慈善事業を行う組織があった。

□パリで訪れたある病院が金持ちの未亡人の寄付によって創設されたものだった。

等々が帰国後も彼の脳裏にしっかりと染み着いて、様々な社会・教育事業に仕事と同じ、またはそれ以上の情熱とエネルギーを注いでいったのだと推察できる。

これに加えて彼が常に重視した公益主義や、彼の持論である「道徳経済合一説」を背景とする経済活動と

社会福祉活動を誠実に実践していったことが、社会福祉事業家としての大きな実績と評価できる。

## 44 生涯の事業となった東京養育院

彼の社会事業の中で特筆すべきものとして、東京養育院（現在の東京都健康長寿医療センター）がある。「養育院の渋沢子爵か、渋沢子爵の養育院か」とまで言われた。栄一が生涯をかけて社会事業に関係するきっかけとなった施設である。

東京養育院が設けられた背景を見てみよう。明治初年に東京遷都が実行されると江戸市中は大混乱になった。都市構成の基幹となっていた武士階級が崩壊し“百万都市”と言われた華やかなイメージは消え、人口も半減し治安も乱れる状況に陥っていた。特に生活困窮者が一時的に激増し、その惨状は形容し難い程だった。

そこで新政府は幕府から引き継いだ“共有金”を使い、道路修理や水道設備などを行った。その一つが東京市養育院の事業だった。では“共有金”とはどんな資金なのであろうか？江戸時代の寛政の改革を行った老中松平定信が遺したもので、江戸の町の互助組織である「町会所」の運営資金を節約させて、節約分の7割を積立させた。これに幕府の資金を足して増額させて作った七分金というものである。火災や飢饉などの時に困窮者に対して米や金銭を配布する際の財源としていた。

### 七分金を使い医療・福祉施設

1872（明治5）年、新政府は七分金の管理を東京府に移管する。そこで東京府知事大久保一翁は幕臣時代から思い描いていた西洋式の医療・福祉施設を実現させようと動き出す。実業家たちからなる営繕会議所（後の東京商工会議所）が資金管理をし、大



東京養育院板橋本院にて

久保の意向を受けた会議所は病人や老人、貧しい子供たちの保護施設を作る案を示した。1873（明治6）年に生活困窮者、病人、孤児や障がい者などの窮民救済の施設である養育院が東京・上野に完成した。

栄一は1874（明治7）年から共有金の管理に携わり、1876（明治9）年には事務長となった。

### 養育院の待遇改善にも尽力

ある日、実態を知る為に上野の養育院に行った栄一は、「いくら無料で収容しているとはいえ、これではあまりに心無いやり方だ。」との感想をもった。そこで収容者を老人や子供などと区別したり、職業訓練所を設けるなど改革に乗り出した。しかし収容者が増加するにつれ、慢性的な資金不足に陥っていた。そのうえ大久保府知事退任後、1882（明治15）年に東京府議会で「養育院の経営を廃止すべき」という議論が起こったのである。当時は「公金を使って生活困窮者を助けたら、怠け者を増やしてしまう」という風潮もあって、施設には反対意見も多かった。東京府議会の議論は廃止の方向に傾き、ついに廃止の決議をなされてしまう。そこで栄一は施設存続の建議書を提出する。大久保から依頼された養育院を自分の手で潰すわけにはいかないという彼の強い信念だった。これ

が奏功し、廃止を免れることになる。

また栄一は、施設の運営基盤を安定化させるために1885(明治18)年に私財2万円を寄贈し、他からの寄贈金を含めて銀行に預金して基金とした。1887(明治20)年ころには基金が20万円になった。府会によって見放された東京養育院は東京府から独立せざるを得なかったのである。1889(明治22)年まで栄一やら同志によって5年間維持された。

#### 栄一、日本初のチャリティーバザーを主催

アイディアマンの栄一の養育院への財政的なサポートは寄付金に止まらず、“貴婦人”たちを勧誘し養育院婦人慈善会を組織した。鹿鳴館、華族会館や歌舞伎座などで毎年チャリティーバザーを行い、収益金の全てを寄付した。

1889(明治22)年には地方制度が布かれて、内務省からの命令により養育院の経営主体が有志グループから東京市へ移管され、東京市の事業となった。その後も栄一は本院以外にも分院を設け、老人養護施設や児童養護施設、更生施設としての感化部を作るなどした。栄一は事務管理を任されて以来、1931(昭和6)年に逝去するまで57年にわたって院長の職にあった。まさに生涯をかけた事業となった。

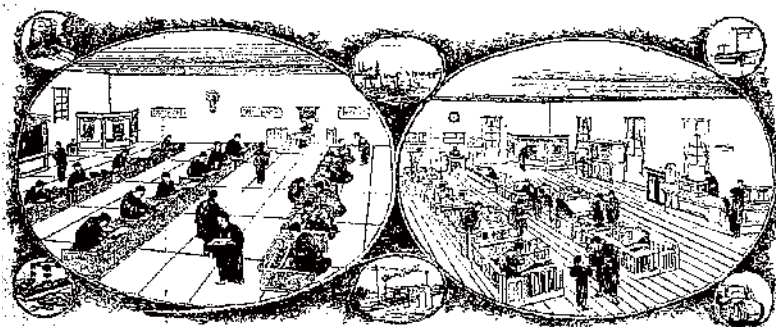
## 45 聖路加国際病院への手厚い支援

栄一は医療福祉の分野でも多額の寄付をするなど熱心に取り組んでいる。医療機関では聖路加病院(現聖路加国際病院)との関りが深い。聖路加病院は1874(明治7)年に英国国教会のヘンリー・フォールズ宣教医師が、東京築地の外国人居留地内に健康社という名前で病院を建てたのが始まりと言われている。1902(明治35)年にアメリカ人のルドルフ・トイスラーが買い取って、聖路加病院とした。栄一は同病院の評議員会副会長兼会計監督に就任している。このほかに医療分野では、社団法人東京慈恵会、恩賜財団済生会の支援や日本結核予防協会副会頭、中央盲人福祉協会会長、らい予防協会会頭や日本赤十字社常議員などになっている。

## 46 科学分野への貢献、理化学研究所設立へ

栄一は、科学技術の振興においてもしっかりと足跡を残している。その代表的なものが「理化学研究所設立者総代」である。

理化学研究所の設立については、1913(大正2)年に高峰讓吉が、栄一のところへ科学研究所設立構



商法講習所の授業風景

想を持ってきたことに始まる。

明治維新以来、日本は欧米発の機械工業を真似ることによって発展をしてきたが、将来的に日本がさらに発展するためには、理化学分野での独創力を確実に伸ばすことが求められる。そこでその分野に特化した研究所の設立が必要であるという申し出だった。栄一は研究所構想に賛意を示し、東京商業会議所や政府、農商務大臣大隈重信の賛同を得て設立に取り掛かる。2年後、1915(大正4)年、帝国議会で理化学研究所の創立が決議された。

栄一は、「理化学分野における、平和的かつ産業に資する活動を行うことで、日本の技術革新を推進し、以て公共の利益に役立たせたい」と考えたと言われている。

1917(大正6)年、栄一は設立者総代として、東京・駒込に財団法人理化学研究所を設立させた。

## 47 高等教育事業への多様な支援

栄一は存続の危機となった東京商法講習所(現一橋大学)への支援にも尽力した。

1875(明治8)年、森有礼が中心となってアメリカのビジネススクールをモデルにした商法講習所が設立された。しかし間もなく森が清国公使となってしまったため存続の危機に陥った。そこで自らが会頭を務める東京会議所が同校を引き取ることとなり、運営を行った。栄一は運営面だけでなく、同校の大学昇格にも奔走した。

1884(明治17)年に東京商業学校(後に東京高等商業学校)、1920(大正9)年には東京商科大学となり、昭和24年に一橋大学となった。大正時代に作られた一橋大学の同窓会組織である「如水会」は、栄一が「礼記」をもとに命名している。



日本女子大校長就任のあいさつ

### 女子高等教育の必要性は感じるも・・・

栄一が女子教育に関わるきっかけは、伊藤博文や勝海舟らと1886(明治19)年に「女子教育奨励会」(現在の東京女学館)を創設(後に館長となる)したことである。

栄一は、もともとは女性のあるべき姿を「良妻賢母」とし、女子教育の必要性は感じていたものの、「女子の高等教育によって女子が生意気になるようでは困る(女らしくない女を出さないようにすべきだ)」と考えていた。また大学教育についても「大学教育は本来、国家がやるべきもの」と考えていた。

1901(明治34)年の「日本女子大学校」(現在の日本女子大学)の創立の際には、大隈重信から紹介されてきた成瀬仁蔵に協力を依頼された時、当初は上記の理由からあまり前向きではなかった。しかし成瀬氏の女子高等教育の必要性を説く熱意に押され、また同校の教育方針を見ると翻意し、資金面の支援を決意する。その後は積極的に運営に携わり、多額の寄付と学生寮を寄贈した。同校において70回以上講演したという記録もあり、1931(昭和6)年に第三代校長になっている。

## 埼玉県出身者の学生を支援、「埼玉学生誘掖会」を創設

1889（明治22）年埼玉県出身の学生が住む寄宿舎を創るため埼玉学友会が結成された。1900（明治33）年に林学博士本田静六の熱意に動かされ、栄一は埼玉県出身の学生のため育英団体設立に動き出した。そして2年後栄一が初代会頭として埼玉学生誘掖会設立し、1904（明治37）年念願だった学生宿舎が現在の新宿区市谷砂土原町に作られた。

## 48 国際化と平和を推進する

日米関係が悪化するなかで、外務大臣小村寿太郎から栄一に「日米関係の改善のため民間からも支援願いたい」との要請がきた。栄一が本格的に日米関係に関与するようになったのは、1902（明治35）年に東京商業会議所会頭（現東京商工会議所会頭）として、日英同盟締結後に欧米諸国を訪問してからである。

1908（明治41）年、米国から「太平洋沿岸実業団」が来日した。翌年、日本から「渡米実業団」が訪米した。栄一はこれの団長となり、代表団は東京や大阪などの商業会議所の主要メンバーで組織された。3か月にわたって太平洋沿岸から東部までの諸都市を巡り、多くの人々から歓待を受けた。



視察中の渡米実業団

## 国際連盟協会の初代会長

1920（大正9）年 国際連盟が発足したのちに、その活動と理念を支援し、国際連盟の精神を広く普及させるために各国で国際連盟協会が結成された。日本でも同協会が設立され、栄一が初代会長となり、アメリカの各界首脳を日本に招き相互理解を深めるため議論を重ねていった。しかし1924（大正13）年、排日移民法が成立すると、4月の同協会総会において「私はこの排日移民法の問題のために、たとえ病が重くならうが、また不幸にして死ぬるようなことがあります。しかし、決して辞せぬ覚悟にあります。」と叫んだ。

## 平和と友情の証「The Doll Project」

日米関係は更に悪化をしていった。排日移民法阻止活動をアメリカ側で展開していたキリスト教宣教師シドニー・ギューリックは、将来の日米関係改善には、日米の児童の間に親日感情、親米感情を作り出していくことが不可欠と判断して、日本側のカウンターパートとして選んだのが渋沢栄一だった。

ギューリックは、日本では雛祭りや五月人形などの人形文化が根付いていることに着目した。そこでアメリカの公立小学校の何千というクラスがそれぞれ人形を一つ購入し、衣服を着せた上で日本の小学校の女生徒に贈ることで、日米両国の交流を結ぼうとしたのである。さらに人形贈呈に当たって小学校のクラスで人形送別会を開いたり、日本の生徒宛ての手紙を書かせれば、各種の作業を通じて親日感情が高まると考えたのである。これを「ドール・プロジェクト」と命名し、栄一に協力を求めてきたのであった。

栄一は、ギューリックの人形計画に共感し、1927（昭和2）年「日本国際児童親善会」を設立し、自ら会長となった。ギューリックと栄一との書簡のやり取りの中で「日本では「青い目の人形」という

童謡が流行っていると聞いている、歌詞を教えて欲しい。このような下地があるなら一層、好都合ではないか」と書いている。ドール・プロジェクトは童謡「青い目の人形」とは全く関係なくスタートして、後に歌をうまく利用するかたちで進んでいった。

1926（大正 15）年 12 月 18 日、親善使節として役割を担った第一陣の 800 体（合計 12,000 体）の人形がニューヨーク港を発った。「ドール・プロジェクト」はアメリカで大きな反響を呼び、全米各地で開かれた人形送り出しの式典は、親日感情を盛り上げるのにおおいに貢献した。

#### 親善人形受け入れ式

翌年 1 月 22 日横浜港に無事到着した。これはメディアでも大きく扱われて、2 月 15 日の大正天皇崩御にもかかわらず、大フィーバーを生み出した。1927（昭和 2）年 3 月 3 日アメリカ大使と渋沢栄一の立ち会いのもとで、「親善人形歓迎会」が明治神宮の日本青年館で執り行われることに決まった。

#### 栄一がサンタクロースに、「特大市松人形」を送る

1927（昭和 2）年 5 月日本国際児童親善会と文部省で協議した結果、一府県一体で 47 体の二尺五寸、友禅縮緬の着物人形を贈ることになった。最終的には 58 体がクリスマスに間に合うように 11 月 11 日横浜港を出港、25 日サンフランシスコ入港し、アメリカでも、市松人形は熱烈な歓迎を受けた。

現在、存在が確認されている人形は日本には約 300 体、アメリカには 44 体のみとなっている。

## 49 2年連続してノーベル平和賞候補へ

栄一による実業界のみならず、前述のような幅広い多様な分野での活躍は、他の明治時代の財界人



答礼人形の送別会

とは大きく違うことはおわかりいただけたでしょうか。その最たるものが、ノーベル平和賞の候補に選ばれたことだろう。

晩年の栄一は国際連盟協会長の職やワシントン会議へのオブザーバー参加に見られるように、国際平和に対して積極的な発言や行動が目立つ。かつて明治時代初期の台湾出兵に対しての反対は、戦争がもたらす国家財政の破綻を危惧してのものであった。しかし第一次世界大戦の影響を受け、栄一は国際平和を強く説くようになっていく。

栄一は、軍備負担が納税者に経済的苦痛を与えること、道徳の伴わない物質文明が国際紛争の原因となり、軍部拡張の理由となっていると論じた。平和の実現については、国民道徳が発達して、その範囲を広げることで真の平和が実現されることとなって軍備の必要がなくなるとも語っている。

このような栄一の“平和論”は国内だけでなく、海外でも特にアメリカ国内で知られるようになっていた。国際交流や民間外交を通じての栄一の国際平和実現への取り組みが評価され、1926（大正 15）年と翌 1927（昭和 2）年にノーベル平和賞の候補になった。推薦理由は、「日米関係を中心とする国際親善平和」で、2 年目は「東洋の指導者に平和賞が与えられる意義」が加わったとされている。ノーベル賞委員会では、栄一の業績を審査するために、アメリカまで出向いて調査を行ったが、受賞には至らなかった。

（注：本稿の写真は全て「渋沢資料館」所蔵）